

## 研修員報告〈バレーボール 山田 晃豊〉



平成16年度・短期派遣  
(バレーボール)



### I. 研修題目

イタリア女子ナショナルチーム、セリエA1チームの育成・強化とコーチングスキル

### II. 研修期間

平成16年9月29日～平成17年9月2日

### III. 研修地及び日程

#### (1) 主な研修先

- ・イタリア女子バレーボール・ナショナルユースチーム (CLUB ITALIA)
- ・イタリア女子バレーボール・ナショナルジュニアチーム
- ・イタリア女子バレーボール・ナショナルシニアチーム

#### (2) 受入関係者

- ・Marco Bonitta (シニア監督)
- ・Luciano Pedullà (ジュニア監督)
- ・Giuseppe Davide Galli (ユース監督)
- ・Stefano Sciascia (ナショナルチームマネージャー)

#### (3) 研修日程

##### ① 通常研修

- ・ナショナルユースチーム (CLUB ITALIA)  
平成16年9月29日～平成17年4月29日 Ravenna (Euroristoro Centro Turistico Sportivo)
- ・ナショナルジュニアチーム  
平成17年6月29日～7月9日 Val di Fassa  
平成17年7月10日～16日 Chiesa in Valmalenco
- ・ナショナルシニアチーム  
平成17年4月18日～30日 Ravenna,  
平成17年5月2日～26日 Verona  
平成17年5月30日～6月4日 Courmayeur  
平成17年6月7日～12日 Montreux  
平成17年6月16日～26日 Reggio di Calabria  
平成17年8月1日～12日 Belluno

②特別研修

- ・ Scavolini Pesaro (セリエA1女子)  
平成17年1月25日～28日、2月16日～20日 Pesaro (PalaDionigi Sant'Angelo in Lizzola)
- ・ Minetti Infoplus Vicenza (セリエA1女子)  
平成16年11月16日～22日、11月29日～12月5日 Vicenza (Pala CIA Vicenza)
- ・ Sant'Orsola Asystel Novara (セリエA1女子)  
平成17年1月13日～17日 Novara (Palasport "Stefano Dal Lago"Novara)
- ・ Radiol05 Foppapedretti BG (セリエA1女子)  
平成16年12月7日～12日 Bergamo (Palazzetto Dello Sport Bergamo)
- ・ その他複数のチームにて随時研修
- ・ 国際大会視察 (ナショナルチーム)、国内大会視察 (セリエ・リーグ) 等

Ⅳ. 研修概要

(1) 研修題目の細目

①通常研修

- 1) イタリア女子・ナショナルユースチーム (CLUB ITALIA) から
  - ・ 一貫指導システム
  - ・ 育成、強化の概要
  - ・ コーチング雑感
- 2) イタリア女子・ナショナルジュニアチームから
  - ・ 育成、強化の概要
  - ・ コーチング雑感
- 3) イタリア女子・ナショナルシニアチームから
  - ・ 強化の概要
  - ・モチベーションについての考察
  - ・ 国際感覚

②特別研修

- 1) イタリア女子セリエA1バレーボールリーグの現状報告
- 2) イタリア女子セリエA1リーグからの報告  
(研修先: MINETTI INFOPLUS VICENZA)
- 3) イタリア女子セリエA1リーグからの報告  
(研修先: Radiol05 Foppapedretti BG/Sant'Orsola Asystel Novara)
- 4) イタリア女子セリエA1リーグからの報告  
(研修先: Scavolini Pesaro)
- 5) イタリアでの選手の育成について  
(視察先: U年齢別、TROFEO、セリエD・C・B2・B1)



## （２）研修方法

2004年9月末から2005年4月末まで、ラヴェンナを拠点に活動するナショナルユースチーム（CLUB ITALIA）が受け入れ先となり、研修を始めた。同時に04年10月上旬から05年5月上旬までセリエA1リーグが行われるため、この期間、ユースチームを拠点にしながラセリエA1各チームでの短期研修、リーグ視察を行なった。

05年4月下旬、ナショナルシニアチームが活動を開始。ラヴェンナを離れ、各都市でシニアでの研修を行った。その後05年6月下旬から7月一杯まで、世界ジュニア選手権に向けてナショナルジュニアチームが活動を開始。ジュニアにて研修。05年8月から再度シニアに戻り研修。05年8月下旬からセリエA1リーグへ向けて各チームが練習を開始。セリエA1チームで研修を行なった。

その他、複数のチームにて随時研修を行なった。大会視察はナショナルチームの国際大会、セリエ・リーグの国内大会、その他各カテゴリーの国内大会を視察。

研修方法としては、各研修先でチームスタッフの補助という形でコートに入り、練習の手伝いをしながらイタリアのバレーを学んだ。

## （３）研修報告【通常研修】

はじめに

日本の伝統芸能である「能」には、「守・破・離」という概念がある。これは人が指導者から何かを学び始めてから、ひとり立ちするまでの段階を表した言葉だ。「守（しゅ）」は指導者の教えを守り身につけ、「破（は）」はそれに自分の工夫を加え発展を試み、「離（り）」は指導者から離れ、自分自身で学んだ内容を完成させていくことを指している。この概念に照らし合わせ、今回の研修では、イタリアバレーの「守・破・離」の段階を追ってみた。

このレポートは、日本女子バレーの積み上げてきたものを引き継ぎ、そして1990年代から急速に力をつけてきたイタリアでの研修の中から、優れた部分を吸収し、日本に合った指導法を模索するものである。

### 第1章 ～「守」～ イタリア女子・ナショナルユースチーム（CLUB ITALIA）

#### 1. CLUB ITALIAを取り巻く環境

##### 1-1. ラヴェンナという環境

今回の研修は、ラヴェンナという都市でイタリアユースチーム（CLUB ITALIA）が受け入れ先となりスタートした。ラヴェンナは、5世紀の後半に滅亡した西ローマ帝国の最後の首都が置かれた町で、5世紀から6世紀に建てられた古い教会が今もそのまま残っている。そのため、初期ビザンティン美術を代表する壮大なモザイク画、建築物、彫刻が数多く残されていた。町の中心部は歴史を感じさせる町並みで、美術的、建築学的な教養がそこに詰め込まれているように感じられた。



ラヴェンナ

## 1-2. 一貫指導システムと問題点

CLUB ITALIAへの選手選考にあたっては、14歳以下の選手発掘、強化を専門とするスタッフがイタリア中を巡回して各州で強化合宿を行なう。こうして優秀な選手が選抜され、シニアの監督を中心とするナショナルスタッフにより選考が行なわれる。ここからナショナルチームとしての強化は始まっている。私もその合宿に参加させてもらったが、ナショナルチームに憧れを持ち、目を輝かせて練習に取り組む選手の姿がとても印象的だった。

CLUB ITALIAは15～16歳の選手15名で構成されている。体育館と選手の宿泊施設、レストラン（一般の人も利用）は隣接していて、学校とバレーボールに集中できる環境が整っている。練習は、CLUB ITALIA専属のプロスタッフである監督の元、コーチ・フィジカルセラピスト・チームマネージャーが指導にあたり、学校の授業を終えて午後5時から9時頃まで行う。また、ジュニア・シニアのナショナルスタッフも、頻繁にCLUB ITALIAに巡回指導に来ていて、トレーニングにあたっては、シニアのトレーニングコーチがメニューを作成し、ユースの段階で必要なトレーニングが行われていた。各セクションでのスタッフの連携は密であり、イタリアナショナルチームとして目指すバレーへの一貫性が感じられた。そうした計画された長期的展望によって、ナショナルチームとしての「守」は形作られている。

しかしながら、この一貫育成のシステムは、イタリアを中心にヨーロッパへ広まったものの、まだ試行錯誤の段階であり、それを模倣したヨーロッパ諸国のほうが先に進んでいると聞いた。イタリアではナショナルチームとしての一貫育成の他に、クラブチームでの一貫育成も同時に進められていて、選手獲得におけるクラブチームとの関係が問題となっているようだ。

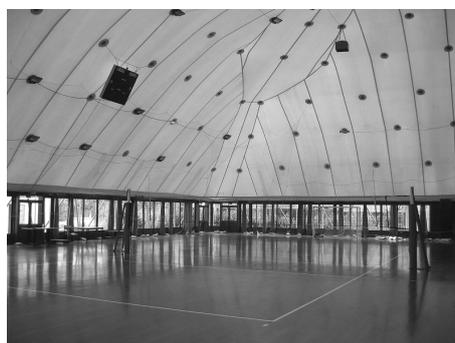
## 2. CLUB ITALIAの育成・強化

### 2-1. 強化方針

今シーズン、CLUB ITALIAはセリエB2リーグに参戦した。試合期間は10月中旬から5月上旬までとなっており、毎週土曜日に試合がある。その後の国際大会を目指し、この約8ヶ月にも及ぶ長いリーグを通して、試合の内容を確認しながら強化のポイントを明確にした練習が行われている。こうして、若い選手が一般のリーグに入って試合



クラブハウスと体育館



体育館内



CLUB ITALIA



をすることは、とても良い経験になっていると思われる。成績は14チーム中10位であったが、来シーズンは一つレベルを上げて、セリエB1リーグに参戦する。リーグ順位に関係なく、協会の方針でそのように規定されている。2年周期で選手を入れ替え、セリエB2とB1の間を行き来しながら強化を図るという方針だ。

選手の育成は、最終的にシニアで活躍する選手を育成することに焦点が絞られ、長い目で「大きく育てられている」という印象を受けた。例えば、ユースからシニアまでの攻撃のパターンと、サインには統一化が見られる。この為、目指す技術がはっきりしていて、必然的にナショナルチームが目指す攻撃が出来る選手に育っていると感じた。

シニアの監督がユースの練習を指導しに来た際、「ユースの時期で一番必要なことは何か」を聞いてみた。返答は、「個人技を伸ばすことが一番重要だ」とのことだった。シニアを頂点とするナショナルチームの育成において、CLUB ITALIAは、シニア監督のいうように、基礎を習得する「守」の役割を担っていた。

## 2-2. 練習内容

表1 CLUB ITALIA 練習の割合

アップは準備体操、柔軟の他、ステップや瞬発力、バランス感覚など色々な要素が含まれたトレーニングを組み込んで行う。

アップ	10%
グループA部分練習（レフト：ライト）	20%
グループB ウェイト・トレーニング	
グループB部分練習（セッター：センター）	20%
グループA ウェイト・トレーニング	
複合練習	20%
6対6形式の練習	30%

部分練習ではポジション別に分けて、トレーニングと並行して行い、各ポジションに必要な個人技術を重点的に鍛える。

次に複合練習では試合の中から必要な部分、状況を取り出した練習を行い、最後に6対6形式の練習で全体を調整していくという形をとっている。

印象的だったのが、部分練習でポジション別に分かれて、効率良く個人技術を引き上げる時間がとられていることだった。

## 2-3. 指導スタンス

ユースやジュニアの時期では、まだプレーに荒っぽさが目立ち、基本技術の完成度という点では、決してレベルが高いとは言えない。しかしながら、攻撃面でのプレースタイルの大きさというか、その先の伸びの可能性を感じさせる。

以前ユースの監督に、試合を見てどう感じたかを問われたことがあった。ミスの多さを指摘し、日本でのこの世代は、派手さはないが、まとまっていて、細かな技術に長けている。小粒でもミスが少なく、独自のバレースタイルを確立しているチームが勝ちやすい。これは勝つためのひとつのスタイルとして確立されている。と答えたところ、彼が言うには、この先選手が成長していく過程で、考えてプレーをすることを教えれば、自然にミスは少なくなっていく。ミスをしないことが優先されていると、個人を見た場合にはプレーのスケールが小さくなり、サーブ、トス回しの選択、スパイクに対する選手の意識にはブレーキがかかる。この若い時期に習得したバレースタイルは後に大きく

影響し、その先伸びていく幅を限定してしまう恐れがある。とのことだった。

確かに、CLUB ITALIAではミスが原因で試合に負けることがあっても、そのスタンスは変わらない。そして、プレーが成功するかミスになるかは別として、きちんと考え、狙いを持ってボールを触っているという印象を受ける。



### 3. コーチング雑感

#### 3-1. 思考の言語化

国民性ということもあるだろうが、練習の場においてもCLUB ITALIAの選手達は、実にコミュニケーションに慣れていると感じた。ここでは、意思表示ができずに行き場を失った言葉に対する救済処置をとる必要が少ないように思える。その場で言葉にして意思表示をすることで、過度に意図を汲む、干渉する、気を使うという必要がなくなるからではないだろうか。しかしながら、「自分の考えを言葉にする」「意思表示をはっきりとする」ということには個人の精神的自立が求められる。イタリアでは、この「思考の言語化」という習慣が、個人の自立に大きく役立っているように感じられる。

日本では上下関係、個々の立場、集団の和などといったことから、人と人との間に恐縮、配慮、遠慮などの感情が発生する。これは集団の規律を守るために必要なことだが、ともすれば、コミュニケーションの足枷になってしまう恐れがある。さらに無言の意思表示の存在。指導者からすれば「言わなくてもわかるだろう」。選手からすれば「意図を汲んで欲しい」ということ。これは信頼関係や経験によってコントロールされていることと思うが、過度の空気の読み合いというか、間のはかり合いは言葉を圧殺し、コミュニケーションを硬直的にしてしまう場合がある。

その場で封じられた言葉は不燃物として残り、別の場所で、別の形で、マイナスの廃棄物としてようやく外に出る。このサイクルをなんとかしようとする苦心される指導者の方は多いのではないだろうか。日本人の持つ繊細な心配りや礼の精神を大切にしつつ、自然に言葉と言葉を、そしてそれによって心と心を通わせる指導というものを模索していきたい。

#### 3-2. 型の習得について

ひとつの完成された技術は、しっかりと身体にしみついた基本に支えられている。その基本を形作る明確な指標として型がある。教育学者の齊藤孝氏は、型について次のように述べている。「型の反復練習を通して土台をつくっていくという考え方は、伝統的な武道・芸道には共通するものである。自分にとっての基本を持つことが、一流とそれ以外をわける。その基本はたんなる注意事項ではなく、反復練習によってからだに沈殿した動きでなければならない」。反復練習が続けられると、その動きはやがて無意識の領域へ沈殿していき、技として定着する。技の量質転化である。その意味は、量が一定程度に達すると質的な転化を引き起こすというものである。無意識の状態においても、練習でやってきたことが出るというのは、その技が量質転化されていることを表してい



る。

イタリアでの研修中、多くの指導者に日本のチームは優れた個人技術を持っていると称賛を受けた。特にディフェンスの技術指導には興味を持たれ、その方法について色々と質問を受けた。イタリアの指導現場で学ぶべきことは沢山あったが、同時に日本の指導の持ち味を再確認することもできた。型の習得は、日本のバレーが重要視してきた正確緻密さの土台となっていると考える。型は、「型にはまる」という言葉にあるように、自由を制限するものと考えられやすい。しかし、それが良い型であれば、むしろ人を自由にするものである。優れた型は、練られて無駄がそぎ落とされ、実戦においても深く再確認させられるものであるし、応用可能なものである。



もとより、優れた型を生み出す土壌は日本に多くあるようだ。齊藤氏はこう言う。「型は、その型の効用を身をもって知っている人間が、それをまだ知らない人間に対して強制力をもって習わせるものである。したがって、型はそもそもが教育的概念である。これが、型とたんなる形との違いでもある」。型を教育的概念とするならば、日本バレーの持つ優れた技術指導がどのような背景で行なわれるのかがわかってくる。例えば、日本の学校が持つ部活では、教員がバレーの指導にあたるのが通常で、バレーを指導するにあたり、それを単なるスポーツ指導としてではなく、総合的人間教育の一環として捉えている。学校の教員に限らず指導者は教育者としての責任を背負っており、その教育者がバレーを教えるということが型の習得を容易にしていると考えられる。

現在のバレーボールは昔と比べて選手の能力と共に戦術、戦略も発達してきて、ひとつの場面で起こりうる状況が多様化している。したがって、自分の型をしっかりとつくっていくことが以前よりも難しくなっているのではないか。そこでより柔軟に変化に対応しうる新しい型が求められてきていると感じる。言い換えれば自分にとっての重要な型を、自分で設定し直す力がもとめられてきている。

## 第2章 ～「破」～ イタリア女子・ナショナルジュニアチーム

### 1. ジュニアの育成・強化

今シーズンのジュニアの活動は6月下旬から始まり、7月末にトルコで行なわれる世界ジュニア選手権を目指して練習が行なわれた。活動期間は1ヶ月という短いスパンでの強化ということで、イタリアにて、ブラジル、中国、日本との親善試合を多く取り入れての強化となった。

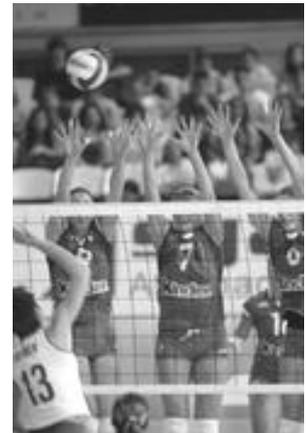
ジュニアの選手はセリエBとセリエAのクラブチームから集められている。練習や試合



ナショナルジュニア

を見てまず感じたのは、実に試合慣れをしているということだった。選手達は長期にわたるセリエ・リーグでの試合経験を積んでおり、「試合のイメージを持って練習ができる選手」として育てている。この感覚というのは選手の成長にとって重要な要素である。

監督はシニアのコーチがジュニアの監督を兼任して指導にあたり、バレーのスタイルはシニアにつながるものとなっている。



## 2. コーチング雑感

### 2-1. ジュニアでの疑問

練習でやってきたことしか試合で出すことはできないというのは、よく言われることだ。しかし、この試合度胸の良さというか、終盤の競り合った場面での勝負強さは、どうやって作られるのだろうか。それがジュニアでの研修中に感じたひとつの疑問だった。否、決して強くはないのかもしれない。「ベストパフォーマンスをしたい」というポジティブな欲求が強いと言ったほうがピッタリする。

近年の世界の女子バレーを見ると、バレーが男子化してきて、ますますバレーの攻撃力が重要になってきている。それゆえに日本と世界の強豪国を比べると、今のところ攻撃における個人決定力の差異は認めざるを得ないが、大事な局面で萎縮するか、最大の力が発揮できるかということは、簡単ではないが、いかようにも変容できると考える。

そういった観点で、練習での意識作りや方法に、なにかヒントがないか探してみたい。そのバレーボールに対するモチベーションの向上を目指して。

### 2-2. 精神力の鍛錬への懐疑

プレッシャーによる選手の萎縮について、こんな話を聞くことがある。「指導者に怒鳴られ、殴られて、選手が精神的に追い込まれ、萎縮してプレーをするのに恐怖を感じる状態。この状態が試合の大事な場面でかかってくるプレッシャーと同じなのだ」。だから追い込んで、追い込んで、選手がどうしようもない状態を指導者が狙って作り、叩けば叩くほど強くなる鋼の刀のように、プレッシャーをかけて精神的に強くしていく。やがてその恐怖を克服して強気のプレーが出来るようになる。これが強くなるために必要なかどうかはわからないが、今の選手たちはこういった動機付けだけではバレーボールから離れていってしまうと私は考える。今の選手たちは、叩けば叩くほど強くなる鋼のようにはいかない。中には、そういった指導に反応して強くなる選手もいるかもしれないが、それは圧倒的少数ではないだろうか。そのような外部からの力だけでは、選手たちへの動機付けは限定されてしまう。受動的に耐え忍び、外部からの刺激によって条件反射的に力を出す力をつくかもしれないが、選手自ら湧き出る「ベストパフォーマンスをしたい」という欲求を奪ってしまう危険がある。

イタリアでは、むしろ選手の失敗することに対する萎縮、恐怖を取り払おうとする方向性が見てとれた。精神的なとらわれによる視野の狭まりを、プレーに集中すること、考えさせることで開放する。そういった流れの中から、狙い通りのプレーが出来た喜び、思ったように出来なかったプレーに対する悔しさが、自然な感情として表れる。



指導者の意図することを的確に行なう順応性は、もちろん重要な要素だ。だが、それのみに偏ることなく、加えて、選手の思考に多くの選択肢（思考におけるハンドルの遊び）を与え、考えの幅を広げること（思考の応用力）。自分で考えたことを自らの意志で行動に移すという実感を持たせること（アイデンティティーの養育）。そういった働きかけが、これからの指導に必要なだと強く感じた。

### 2-3. 限界への挑戦

とはいうものの、理想論だけではなく現状を直視して、他でもない日本が世界と戦うということを考えた時にはどうだろう。イタリアには選手のモチベーションを誘発する素晴らしい環境がある。世界の最高峰と呼ばれるセリエA1リーグや、ヨーロッパ大陸での活発な切磋琢磨。自国への誇り、そしてナショナルチームへの憧れ。環境が選手のモチベーションを引き上げているといっても過言ではない。それは熱帯雨林のイメージに近い。その環境によって樹木は活性化し、力強く自らの力で育っていく。そういった環境を創り出し、世界のバレーのレベルアップに大きく貢献していることに、羨望と敬意の念を抱かずにはおれない。日本はどうだろう。やはり、稲作のイメージに近いのではないか。絶えずあらゆる障害に対処し、細心の注意を払って育てていくことが必要だ。

さらに世界の強豪国と日本の選手の先天的な体格や能力を比べると、日本が見劣りしてしまうことは否めない。ちょうど大きなエンジンの車と、小さなエンジンの車でレースをしているようなものだ。そこで小さなエンジンでも大きなエンジンの車に勝てるように、エンジンの性能を向上させ、ドライビング技術を磨き、正確緻密なレースをする必要がある。スピードスケートの清水宏保氏は「防衛本能による心理的限界をいかに肉体的限界に近づけるか」をテーマにして、限界の幅を広げているという。限界の幅を広げるためには、練習やトレーニングはストイックなものとならざるを得ない。しかしながらそれが選手にとって「やらされる」という受身的なものであれば、自発的な思考は生まれてこないし、自分で自分を追い込む強い意志を得ることはできない。

そこでどうやって、選手が自らの限界に挑戦するモチベーションを与えるかが、指導者として重要な工夫となる。また、教わる側は、「守」から「破」へ発展するために、どういう姿勢で教わるかが大事だと考えている。

### 2-4. 型からの発展

ジュニアの指導現場では、単独プレーよりも、セットプレーに対する意識の高さがうかがわれた。ラリー全体のコーディネーションが重視されていて、実戦になると単独のプレーを見て予想したよりも良くボールがつながる。一言でいうと試合で起こりうるプレーに対しての慣れが作られていた。これは練習で試合の場面をうまく取り出し、選手が実戦に近い意識で練習をしていることを裏付けている。優れた指導者は指導者と選手との間の線だけではなく、選手同士の間にも多くの線を張り巡らせることが出来るという。練習方法の工夫、ルールの設定等によって目的意識を具体的に持たせ、考えてプレーする習慣を作る。そうして選手のモチベーションを喚起し、選手同士の競い合いという状況を作り出す。そのためにイタリアの指導者たちは選手に理解させることに時間を割く。各練習の始めには練習の方法と意図の説明があり、練習中も選手と活発にコミュ

ニケーションをとり、意識とプレーのつながりを確認する。

これからは「心・技・体」に加えて、知恵の「知」が必要であると聞いた。バレーでも同様に、ますますスポーツインテリジェンスが重要視されてきている。私は日本の指導の優れた点は、心技体を育成する経験と感覚（センス）だと思っている。いわば、理論で説明できないものを身体に深くしみこませていて、ハートによって感化を与える能力。こういうと精神主義的になってしまうかもしれないが、それが日本のバレーが一番大事にしてきた指導能力ではないだろうか。そこにイタリアバレーの結び目であるスポーツインテリジェンスを、どう組み込んでいくか。双方の舵取りが重要だと感じている。

### 第3章 ～「離」～ イタリア女子・ナショナルシニアチーム

#### 1. シニアナショナルチームの強化

##### 1-1. 一貫育成の成果

今シーズン、シニアの練習は4月18日から始められた。この時期はセリエ・リーグのプレイオフが行われているが、試合が終了したチームから選手が集められた。オリンピック後ということで、若手選手を中心にシニアAとシニアBに振り分けられ、それぞれ目指す大会へ向けての練習となった。

表2の14名の選手の内、9名がCLUB ITALIA (P.58レポートVol.1参照)の出身者である。CLUB ITALIAは8年前に発足したチームであるから、そこからこれだけの選手をナショナルチームに送っているということは、イタリア女子の強化プログラムの成果が現れてきているといえるだろう。

表2 イタリアナショナルシニアチーム (2005 Montreux Volley Masters 登録選手)

番号	姓	名	生年月日	体重	身長	所属クラブ
2	VIGANO	Natalia	1979/11/24	66	179	Asystel Novara (A1)
3	CELLA	Elisa	1982/6/4	72	186	Original Marines (A2)
5	ANZANELLO	Sara	1980/7/30	78	192	Asystel Novara (A1)
6	FIORIN	Valentina	1984/10/9	76	186	Caoduro Cavazzale (A2)
7	GUIGGI	Martina	1984/5/1	75	188	Scavolini Pesaro (A1)
8	BARAZZA	Jenny	1981/7/24	77	188	Foppapedretti Bergamo (A1)
9	CENTONI	Nadia	1981/6/29	63	185	Scavolini Pesaro (A1)
11	ORTOLANI	Serena	1987/1/7	69	187	Foppapedretti Bergamo (A1)
13	VINCENZI	Cristina	1979/5/14	71	184	Big Mat Chieri (A1)
14	LO BIANCO	Eleonora	1979/12/22	70	172	Monteschiavo Jesi (A1)
15	DEL CORE	Antonella	1980/11/5	73	182	Scavolini Pesaro (A1)
16	FERRETTI	Francesca	1984/2/15	68	180	Volley Modena (A1)
17	ARCANGELI	Chiara	1983/2/14	57	165	Despar Perugia (A1)
18	BORRI	Maurizia	1977/2/24	65	177	Big Mat Chieri (A1)

—国際大会視察での試合結果—

・TROFEO VALLE D'AOSTA 2005 (05/31～06/04)

参加5カ国：ブラジル、イタリア、セルビア&モンテネグロ、ドイツ、ロシア



1位ブラジル、2位イタリア、3位セルビア&モンテネグロ、4位ドイツ、5位ロシア

・ Montreux Volley Masters 2005 (06/7 ~ 06/12)

参加8カ国：ブラジル、イタリア、ドイツ、ポーランド、中国、日本、キューバ、アメリカ

1位ブラジル、2位中国、3位イタリア、4位日本、5位ドイツ、6位ポーランド

・ World Grand Prix 2005 (06/24 ~ 07/18)

参加12カ国：ブラジル、イタリア、オランダ、ポーランド、ドイツ、日本、中国、韓国、タイ、アメリカ、キューバ、ドミニカ共和国

1位ブラジル、2位イタリア、3位中国、4位キューバ、5位日本、6位オランダ

## 1-2. 練習内容

AM：ウエイト・トレーニング。或いは、部分練習+複合練習。

PM：(4:30~7:30)

練習の内容は時期によって大きく異なるが、一例として鍛練期はこのようになっている。アップはトレーナーの指導により、準備体操からステップ系、補強トレーニングを組み込んで行い、アップを兼ねたパート別練習に入る。ここ

表3 ナショナルシニアチーム練習の割合

アップ(体操、ステップ系、補強トレ)	10%
アップを兼ねたポジション別練習	15~20%
複合練習	15~20%
6対6形式の練習	40~50%
補強練習・補強トレ(バランス系)→ダウン	10%

で各ポジションに必要なプレーを行う。技術を伸ばすというよりは、試合での感覚を呼び起こして慣れを作るといった感じだ。その後に発汗し、体が十分温まっている状態でストレッチを行う。

次に複合練習に入り、先の練習で起こした感覚を実際チームプレーにつなげていく。試合の中から必要な部分を取り出した練習を行い、ピークを6対6形式の練習にもっていく。

最後に求める評価基準に満たないプレーに対して、または負けたグループに対して、若干の補強練習が行われる。他の選手はトレーナーの指導の元、ダウンに入る。

## 2. モチベーションについての考察

### 2-1. より高いモチベーションを

スポーツの世界では「切磋琢磨」に代表される、人間を磨き合うという関係が、受け継ぐべき財産として伝達されてきた。この関係のあり方は、各人の硬い本質的な部分を摺り合わせるわけであるから、摩擦熱が生ずる。



ナショナルシニア

意見や価値観の違い、感情のもつれ、傷つくことなど。それらを乗り越え、摩擦の中から新しい気付きを得て成長していくことに、磨くことの意味がある。「技を磨く」にしても、一つの技術を技として定着させるためには、観念だけではだめで、相当の訓練が必要となる。それを通り抜けてはじめて気付かなかったものを察知できるようになり、潜在能力を上げることが可能となる。これらは本来最も基本的な土台のはずであるが、近年、各人の信念を摺り合わせ、お互いに磨きあうような熱い人間関係、また、精神や体を限界まで追い込み、潜在能力を上げるようなトレーニングは、どうも精神主義的に捉えられてしまって人気がないようだ。



そこでしっかりとした土台の上に、選手達を動機付ける方法を模索しなければならないと感じている。イタリアシニアでの練習は、選手の内的意識レベルをどのような方法で引き上げるかが主眼点とされていた。

## 2-2. 競争意識の強化

勝負事で相手と対したとなれば、勝つか負けるかであり、闘志が湧き出てこなければならない。だとすれば、練習の中でも選手同士の競争心を喚起し、集中力を高めるような局面設定が必要になる。

同じチームの選手同士でも、ネットを挟めば闘志が湧くというのが本来の心情であろう。そのため、シニアでは「選手」対「選手」という練習形態を多くとる。さらに、目的とするプレーへの意識を浮き上がらせる条件を設定し、「勝ち負け」をはっきりさせる。

その後、求める基準に満たなかった者、或いは負けたグループに対しては、罰としての意味合いを含む練習を行ない、勝負にこだわる姿勢をつくる。

## 2-3. 客観的評価基準

競技スポーツでは、客観的に正確な評価をする目を持つこと、評価をされることに対してタフになることが必要である。そのためには、指導者が客観的評価基準をもっていないなければならない。近代バレーは情報戦の要素が色濃くなり、データの活用による分析能力が向上してきている。そして、それをどのような形でチームの強化に結びつけ、選手にフィードバックしていくかが、他チームとの差別化となる。

シニアでの6対6形式の練習では、毎日監督の求める評価項目をアナリストが分析し、各ローテ、各選手の技術データを蓄積していく。こうして自チームの強みと弱みが正確にあらわれ、数式を解くように、練習メニューや方法、試合での選手起用等、それらすべてがデータを元に組み立てられる。その合理性は予想以上だった。

選手達は、正確に評価されているということを感じながら練習をしている。毎日の練習の中に、ベストのパフォーマンスをして、良い評価を得るための試験といえる状況が作られていた。

「破」から「離」へ。どうしても強くなりたい、前進したい、そういう向上心を持っ



た個人が、お互いを高め合う。そういった磨き合いの中からプロの意識はつくられていくのではないか。

### 3. ナショナルチームの練習に訪れる沢山の指導者達

ジュニアでは、強化合宿と平行して、指導者研修が行なわれていた。ワークショップと題して、集まった指導者達は練習を見学し、終了後に質疑応答をする。質疑応答では監督に活発な質問が投げかけられ、ざっくばらんなバレー談義に花が咲いていた。

シニアでも同じように指導者研修を行い、連日沢山の指導者たちが練習会場に詰め掛けていた。受講者は規定のレポート用紙に練習内容を記入し、練習終了後に監督のサインをもらうことになっている。サインを書き込みながら受講者の質問に熱心に答える監督の姿が印象的だった。

研修という名目がなくとも、ナショナルチームの練習は見学自由であり、練習終了後に監督を取り囲んで質疑応答をする。そんな光景がよく見られた。集まった指導者達が肩を並べて話し合う姿に、チームの垣根を越えた仲間意識を感じた。ノートを取りながら真剣な眼差しで練習に見入っている姿に、イタリアの指導者達の熱心さを見た。

### 4. イタリアの指導者に見る国際感覚

1990年代、イタリアに世界中からトップ選手が集められて行われる「セリエA1リーグ」の影響を色濃く受け、ヨーロッパバレーのレベルは急速に上がってきた。イタリアの指導者の語学力は高く、ヨーロッパのみならず、各国との間で情報のシェアリングを行っている。さらに様々な国の価値観、精神文化がイタリアのクラブチームに持ち込まれ、柔軟な国際感覚を身に付けるに至っている。異文化交流を通して目的を共有する。この行為が、彼（女）らの人生観に広い視野を与えていると推測する。



文化の違う各国の選手達が、ただ集まっただけならば、それは「カオス」だ。当然そこに明確な羅針盤が必要とされる。その状況がイタリアの指導者達に、文化の違いを超えて共有できるような、バレーに対するスタンスを要求してきたのであろう。

「われわれはいつだって何かしら制約を感じている。自分たちを取り囲む人とか物とかに影響をうけている。お茶のスプーンは銀にかざるといって、金が出たりすると、さっそく気をもむ。こういった次第で、いろいろと気兼ねしているうちに、いつしか心も麻痺してしまい、われわれの天性に備わっているかもしれない何か偉大なものを自由に表現するまでにはいたらない。われわれは、外界の物事の奴隷にすぎず、物事がわれわれを萎縮させるか、のびのびさせるかに応じて、われわれは、つまらない人間にも見れば、偉い人間にも見える」。（\*ゲーテ）今回の研修では、そんなことを考えさせられた。

#### (4) 研修報告【特別研修】

##### 研修レポートvol. 1

—イタリア女子セリエA1バレーボールリーグの現状報告—

2005年1月10日

現在のバレーボールは、日本が世界のトップレベルにあった1970年代から、1980年代のアメリカ男子、中国女子の台頭へと移り、そして1990年代中頃のイタリア、ブラジルを中心としたプロの台頭へと発展してきた。中でもこのプロの台頭は、世界のバレーボールレベルを大きく引き上げた。

イタリアのセリエAバレーボールリーグが、名実共に世界のトップレベルのリーグであることはご周知の通りで、ヨーロッパを中心に世界中から国際的指導者、スター選手が集まり、熱戦を展開している。このイタリアを中心とするプロリーグの影響は、ヨーロッパ各国へ広がりを見せており、近年、ヨーロッパのチームは著しく力をつけてきた。

#### 1. ヨーロッパバレー活性化の背景

その背景には、今ヨーロッパ全体が、EU欧州連合（25ヶ国加盟）として統合への道を進んでいることが挙げられる。シェンゲン条約（15ヶ国加盟）で、EU内国境の通行自由化と簡素化を目的とした共通滞在規定がとられ、ユーロ貨幣（12ヶ国使用）への切り替えが成功した。

こうした文化的背景も大きく手伝って、「コッパヨーロッパ」のようなクラブチーム間での国際大会や、ナショナルチームとしての国際大会等を通して、容易にヨーロッパ各国の間で活発な交流、強化が行われているわけだ。

先日、「ヨーロッパチャンピオンズリーグ」の、ベルガモ（イタリア）対カンヌ（フランス）の試合を見に行った。ホーム&アウェイの移動はバスでも移動可能な距離であり、そして、その互角の戦いぶりに、この先のヨーロッパバレーの発展を感じさせられた。

#### 2. イタリア女子セリエAバレーボールリーグ（バレーカップ）の方式

バレーカップは12チームで構成されており、ホーム&アウェイ方式で試合が行われる。レギュラーシーズンは2回総当りのリーグ戦を行い、ここでプレイオフへ進出する上位8チームを決める。

次に、レギュラーラウンドの1位×8位、4位×5位をグループAとし、2位×7位、3位×6位をグループBとして試合を行い、先に2勝したチームがそれぞれセミファイナルへ進む。

セミファイナルでは、グループAの勝者同士とグループBの勝者同士が試合を行う。ここでは先に3勝したチームが決勝へ進む。決勝も同様に先に3勝したチームが優勝となる。

バレーカップの試合期間は10月から5月までと長期にわたっており、その間に他の大会も同時に進行させている。イタリアのクラブチーム間で競う「スーパーカップ」・「コッパイタリア」、ヨーロッパのクラブチーム間で競う「コッパヨーロッパ」がある。

「コッパヨーロッパ」は3つの大会からなっており、「ヨーロッパチャンピオンズリーグ」（イタリアから2チーム出場）、「トップチームカップ」（イタリアから1チーム出場）、

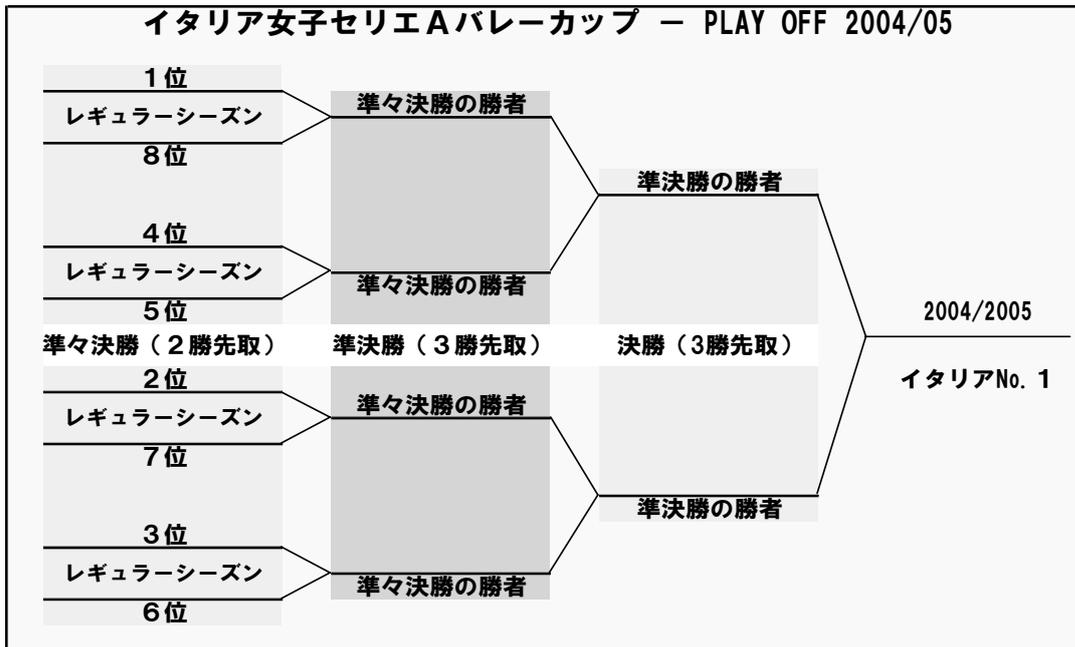


図1

「コッパCEV」（イタリアから2チーム出場）がある。それぞれの大会には、前年度の成績等の条件により、どの大会にどのチームが出場するかが決められる。

さらにイベントとして、オールスターゲーム（イタリア代表VSセリエA選抜）があり、大会の種類は多岐にわたっている。各大会にはそれぞれのスポンサーがついており、その大会運営の組織に驚愕せざるを得ない。複雑なようだが、うまく大会の時期がずらされていて、週に1つのチームが行う試合は、ほぼ2試合と整理されている。

バレーカップは通常日曜日（TVの関係で土曜日の場合もある）に行うので、試合開始時間は夕方（17：30～18：00）だが、コッパイタリアは水曜日に行なうので、仕事を終えてからでも観戦ができるように、開始時間は20：30となっている。その代わり終了時間は深夜になるが…この辺は国民性の違いを感じる。

## 研修レポートvol.2

—イタリア女子セリエA1リーグからの報告—

期 間：2004年11月16日～11月22日、11月29日～12月5日

研修先：MINETTI INFOPLUS VICENZA

現在、企業スポーツを取り巻く環境は変わりつつあり、一企業の余力に頼るだけでは困難な状況になっている。欧州のような「総合型地域スポーツクラブ」の必要性が叫ばれる中、企業、学校、地域のスポーツ環境には、まだカベがある。しかし、あらゆるレベルでの共同作業が進めば、日本のスポーツ界に活路が見えてくるかも知れない。バレーボールが大衆に支えられるようなスポーツになるために、私達若い世代は、これまでの道のりを学び、さらに新しいものを学んでいかなければならない。



## 1. MINETTI INFOPLUS VICENZA

ビチェンツァはミラノ、トリノに次いでイタリアで3番目に産業の発達した町である。人口12万余りのこの小都市には、1,600もの企業があり、ビチェンツァの輸出量だけで、ギリシャ国家と同じ量の輸出を行っている聞いた。

ビチェンツァは、女子のセリエA1の中では、唯一会社組織の形態をとっているクラブである。ここビチェンツァの他に、イタリア全土に16の子会社（それぞれが複数のクラブチームを所有）がある。スポンサー数は40社にのぼる。ジェネラルマネージャーの話では、「スポンサーは、大きなところが小数ついているよりも、小さな会社でもいいから沢山のスポンサーを確保する必要がある。会社がスポンサーから降りたときのリスクが少ないからだ。」とのことだ。

会社はそれぞれ行う業務を分けて分社化されている。主なものとして以下の4つがある。

- ①女子チームの運営会社
- ②男子チームの運営とブランド管理の会社
- ③イベント、マーケティング、事務を担当する会社
- ④株、不動産（選手の住居等）を扱う会社

## 2. イタリアでの大会の種類と分類

本社にあたるビチェンツァでは、以下のチームを持っている。

イタリアでの大会は以下の4つのカテゴリに分かれている。

- ①セリエA1・A2、B1・B2 (Nazionali: ナショナルリーグ)
- ②セリエC、D (Regionali: 州のリーグ)
- ③Prima Divisione・Seconda Divisione・Terza Divisione (Provinciali: 県のリーグ)
- ④アンダー 17・15・14・13歳 (Giovanili: 年齢別の大会)  
\*男子は年齢の分け方が異なる。

表4

<b>Nazionali (ナショナルリーグ)</b> セリエA1女子、セリエB1女子、セリエB2男子
<b>Regionali (州リーグ)</b> セリエD女子、セリエD男子
<b>Provinciali (県リーグ)</b> Seconda Divisione女子
<b>Giovanili (年齢別の大会)</b> Under 17・15・14・13女子、Under 18・14男子
<b>Minivolley (ミニバレー)</b>

## 3. 選手の生活環境

選手の生活環境は、サラリーと、個々に（若い選手は2人での共同生活のケースもある。）住居、車（必要に応じて）が提供されている他は、すべて自己管理となっている。食事普段は3食とも自分達で済ませる。午前、午後と練習があるときは、昼休みを長く取ってあるので選手は各自で食事を済ませ、十分に休息をとってから再び体育館へ来て練習をする。食事の栄養管理が不安に思えたが、日本のVリーグのようにチーム専用の宿舎と、食事の管理が整ったクラブハウスを持っているチームは見当たらない。チー



ムで活動する以外の時間は個人の自由だが、若い選手でも、自分の生活を自分で律することが出来なければ当然良いパフォーマンスは出来ないし、やっていけないことになる。さらに外国から来る選手にはもちろん通訳などはついていない。その中で即戦力としてのパフォーマンスを求められ、それに応えられなければバレーをする場所を失うことになる。この厳しい環境が選手のプロ意識を喚起している。

#### 4. 地域貢献

##### ①幼児対象のミニバレー教室

週3日、幼児を対象にしたミニバレーとミニバスケの教室がある。体育館に貼ってあるポスターには「セリエAの私たちと一緒に遊ぼう!」、「最初の1ヶ月は無料!」とある。子供のスポーツ離れを危惧し、小さいうちからスポーツに親しませ、その楽しさを知ってもらおうという目的だ。専属のスタッフが指導に当たっている。

##### ②学校とタイアップしてのスポーツ普及活動

現在イタリアの学校では体育の授業がとても少ない。小学校が週に1時間、中学・高校が週に2時間程度しか体育の授業を行っていない。さらに日本と違って学校が持つ部活動というものはほとんどないので、イタリアの子供達に対して各スポーツのクラブチームが担う役割はとても大きいものとなっている。こうしてサッカーをはじめ、イタリアのクラブチームは「総合型地域スポーツクラブ」へと発展してきたのであろう。



ビチェンツァでは市内の学校と協力して、授業の一環としてバレー教室を開いたり、選手を派遣して教えに行ったり等の、バレー普及活動をしている。さらに外国から来ている選手が沢山いるので、例えば世界史などの授業で選手がゲストで行って、自分の国の歴史を話す等の活動も行っている。

##### ③ホームゲームでの託児所

地域の託児所と提携して、試合観戦に来る親子の子供を無料で預かり、小さな子供を持っている家族も試合観戦を楽しめるようにしている。10人の子供を預かったとして、20人の両親が来るので、採算はとれるとのこと。託児所のほうも、試合観戦に来る親への宣伝効果があるので、格安の値段で契約をしているとのことだ。体育館入り口には、その宣伝のポスターが貼られ、ビラが配られていた。

##### ④各種イベント

私が訪問している間に、小学生対象のクリスマスフェスタがあった。700～800人の子供達が市内から集まり、女子のA1・B1の選手、スタッフも参加して、クリスマスの音楽が流れる中、いろいろな工夫が凝らされたアトラクションを楽しんでいた。人数が

多いため、2部の入れ替え制で行っていた。これも学校とタイアップして行なわれていて、とても良い地域貢献だと感じた。

## 5. 憧れの力

ある日、セリエA1のホームゲームの後に、アウェイでセリエB1の試合があった。B1の選手達は、A1のホームゲームの手伝いを勤め、試合を観戦した後でアウェイの試合会場へ向かった。この日、A1のベンチにB1の選手が2名入ったので、この2人は2試合連続して出場した。集中力がなくなってしまうのではないかと私の心配は外れ、B1の練習では見なかったような素晴らしいプレーを披露し、上位のチームに快勝してしまった。(現在ビチェンツァA1の選手は11名しかいないので、B1から選手を1名補充している。A1に病人や怪我人が出た場合も同様に、B1から補充する。)



B1・Dの選手達はA1と同じ体育館で練習をしているので、A1の練習や試合をいつも身近に感じることが出来る。そしてA1の練習に加わり、ベンチに入るチャンスもある。この日はA1で感じた緊張感、レベルの高いバレー、精神の高揚をB1の試合にも持ち込み、百パーセント以上の力が引き出されたというわけだ。見て感じて憧れるという力が、選手個人のパフォーマンスレベルを上げている。個人技の習得に関しては、指導者が教えることよりも、良い見本を見て、憧れ、模倣してそれを身に付けるという「憧れの力」のほうが勝っていると感じた瞬間だった。ちょうどカンフー映画を見た後で、自分も強くなったような気持ちになるみたいに…この選手の憧れを喚起する環境の大切さを確認した。

イタリアの子供達の間では、日本から入ってきたバレーのマンガが人気だとスタッフから聞いた。現在、もっともメジャーな形で子供達にアピールできるのは、週刊少年誌であろう。ここに載ったものはアニメ化され、文庫化され、インターネット上に広がっていく。マンガの醍醐味の1つにキャラクターの成長がある。お気に入りのキャラクターに感情移入し、彼らが成長すると、読者も疑似体験として精神的に成長した気持ちになる。憧れのキャラクターの心の強さがなぜ生まれたかを知れば、それを自分の経験として取り入れ、自分も憧れのキャラクターのようになろうとする。これも「憧れの力」の作用だ。憧れは人間の内在的な力を刺激する。そして何よりも力強く持続性のある力を生む。

最近では学校の教育現場でも、職場でも、何かに憧れ、それを追い求め続ける力というものが弱まってきていると言われている。スポーツに携わる我々が「憧れ力」を発信する存在でありたい。そう願っている。

### 研修レポートvol.3

—イタリア女子セリエA1リーグからの報告—

期 間：2004年12月7日～12日、2005年1月12日～18日



研修先：Radiol05 Foppapedretti BG / Sant'Orsola Asystel Novara

試合の前だろうと、試合のさなかだろうと、勝利のあとだろうと、敗北のあとだろうと、断固としてたじろがない。試合で最高のパフォーマンスをするために、何をなすべきかをはっきりとわきまえていて、厳しい環境に身を置き、そこに楽しみを見いだす。そういったプロとしてのあるべき姿を、このセリエAの選手たちはどう身につけて来たのだろうか。

### 1. 指導者の存在

強いチームになればなるほど、監督の存在は影にまわっていて、選手個々の能力、個性が引き立てられていると感じられた。組織の隅々まで細かく気を配り、しっかりと全体を掌握しているのだろうが、そんな素振りはいささかも外へ出さないで、ただそこにいるという印象しか受けない。たしか老子の言葉に、「最も理想的な指導者は、部下から存在することさえ意識されない」とあった。その次に「部下に敬愛される指導者」、「部下から恐れられる指導者」、「部下から馬鹿にされる指導者」とつづく。その指導風景からそんなことを思い出した。

### 2. プロの意識とは？

指導者に手取り足取り指導され、引っ張ってもらおうという「育てる」時期は、卒業しているように感じる。試合で選手達は、精神的な指導を求めている。勝つための戦術、戦略を求めている。指導者は1点を取る確立が高い方法を、要所で指示していく。相手が何をしてくるか、それに対してどう対処するか。狙いはどこにするか、そのあとはどう畳み掛けるか。蓄積されたデータを基に口頭で、サインで、アドバイスが送られる。冷静に、抜け目無く。



練習では、そのデータによって強化のポイントが明らかにされ、メニューが組み立てられる。各練習の意図、目的が細かく選手に伝えられ、常に目的意識を持った練習が行われている。その指導風景からは、「指導者」というよりも、「インストラクター」を連想する。このレベルになると、選手達は自分のコンディションの作り方を知っていて、個々に相手のイメージと自分のプレーを確認しながら、試合へ向けての確認作業をしているという印象を受ける。とはいえ、中には二十歳前の若手もいて、そういったこれからの伸び盛りの選手には、全体練習の後に丁寧に個人指導している場面も見受けられた。こうして若く有望な選手がプロ集団の中に飛び込んで、その厳しい環境に揉まれ、高い意識を自然と感じ取り、身に着けていくのだろうか。

### 3. 環境が選手に与えるモチベーション

どうしたら選手の技術を伸ばすことができるのか、どうしたら一流のスポーツ選手として人間力を養えるのか。それは指導者として悩み考え続けなければいけない命題で

あろう。その上で指導者が選手に与える影響力は第一に重要なことだ。イタリアでもそれは同じであろうが、とりわけ、環境が選手に与える影響が大きいように感じる。そこには世界のトップリーグでプレーしているという自負、誇りを促す雰囲気がある。選手は様々な国で経験を積み、ある地点まで到達した者が集まっている。その中で、プロ同志のかかわり、試合での経験を通して、さらに経験値を上げていく。最近日本の選手も海外の高いレベルでの活躍の場を求めて、数人の選手が挑戦をしている。おそらくその選手たちのモチベーションは、その厳しい環境が自然に求めてくるだろう。そうしてさらに自分の限界を引き上げることに挑戦していくのだろう。そういった環境を日本に求めるためには、まず、日本のリーグが世界のトップリーグと肩を並べるリーグになることが必要である。自然と高いモチベーションを求められる厳しい環境。現状に満足せず、さらに高い目標へと引き寄せられる環境。それが必要だと強く感じる。



#### 4. セリエAのチームづくりの概要

セリエAチームの練習は8月から始まる。即戦力が集められ10月からの試合に臨む。チームの人数構成は12名ちょうどが通常で、それに満たない場合は、そのクラブが持っている下のリーグの選手を補充したり、リーグ途中でも選手をスカウトして即戦力を獲得したりする。ファイナルが終了するのが5月。それから約3ヶ月間はOFFシーズンとなる。リーグ終了後は、ほとんどの選手が各国のナショナルチームに戻る。だから、世界のトップレベルの選手は皆、一年中試合をし続けているという状況だ。セリエAのイタリア人選手で、ナショナルチームに入っていない選手はどうオフシーズンを過ごすのかというと、各自でトレーニングをするか、ビーチバレーをしてシーズンに備えているとのことだ。

Vリーグではナショナルチームに入っていないなくても、各チームで主力となる選手が沢山いるので、セリエAのような長期のオフシーズンはない。だからたいてい夏場は鍛錬期となり、個人技術を上げる時期がある。この時期に新人の選手を戦力になるように育てていくわけだ。日本選手が細かな技術に長けているのはこの鍛錬期によるものと考えられる。人数構成はセリエAと比べて断然多い。戦力の補充は、最近ではチーム間の移籍という形で即戦力を補充する傾向にあるが、高校から選手をスカウトし、育てていくというのが通常だ。こういったことからセリエAのチームづくりに比べて、Vリーグのチームづくりには選手を育てるという要素が重要になっている。

#### 5. 選手の移籍に関して

選手の移籍に関して、どう考えているのかとあるチームの監督に聞いたところ、「イタリアでは選手が移籍する場合、移籍先のチームから移籍金をもらうという規則があり、その移籍金でまた即戦力になる選手を補充するわけで、この規則は選手を育てる上

でも重要なものだ。」との答えだった。というのは、選手としては、自分をよりよい条件（より強いチーム、自分の望むポジションでパフォーマンスを発揮できるチーム、より報酬の多いチーム、それぞれ目的は様々かと思うが。）で受け入れてくれるチームでプレーし、そうして環境の変化を経験することによってさらに選手としての幅を広げることが出来る。送り出すチームとしては、育てた選手をそれに見合ったお金で売ることになるわけで、様々な感情面はお金によって清算される。ということらしい。それを聞いて重苦しい感情を伴って納得した。これについてはイタリアと日本では環境が違っているので比べられないが…。



#### おわりに

「確かに世界は、平地にいるときと、山の頂きにいるときと、また、原始山脈の氷河の上にいるときでは、違って見えるだろう。ある立場に立てば、世界の一角は他の立場におけるよりも良く見えるだろうが、しかしそれだけのことで、ある立場における方が別の立場よりも正しいなどとはいうことができない。」\*ゲーテ

#### 研修レポートvol.4 2005/04/26

—イタリア女子セリエA1リーグからの報告—

期間：2005年1月25日～28日、2月16日～20日

研修先：Scavolini Pesaro

セリエAリーグはプレイオフに入ると、試合会場は一層熱気を帯びる。先日のセリエAサッカーの試合では、判定を不満として、観客席から大量の発炎筒がピッチに投げ込まれ、それが選手に当たって試合が中断になった。火柱があちこちであがるのをテレビで見てぞっとした。バレーボールはそのような危険はないものの、かなり露骨なホームチーム最良の雰囲気だ。

#### 1. Scavolini Pesaro

このチームはイタリアナショナルチームの若手選手を一番多く抱えているチームで、ユースからシニアへの過程を視察することを目的に研修をした。その過程については後のレポートに回すことにして、このチームの研修で感じたことを紹介する。

セリエA1以外にメインスポンサーのScavoliniの所有するバレーグループは3つ。その3つのグループがそれぞれの年齢層、カテゴリーのチームを持っている。「ミニバレー」、「アンダー13から17」、「セリエ・リーグ」のチーム。今回、一例としてScavoliniグループを挙げたが、多くのチームがこのようにして地域スポーツクラブとして存在している。

8ヶ月にも及ぶこの長いリーグも、いよいよ佳境に入るわけだが、レポートvol.2で紹介したように、イタリアではセリエAリーグの期間中に複数の国内大会、ヨーロッパクラブ間の国際試合を平行して行っている。決勝戦がひとつのピークだとすれば、ピーク

表5 SCAVOLINI

	Robursport Pesaro	Volley Montecchio	Snoopy Villa Fastiggi	合計
Minivolley	7	3	4	14
Under 13	3	1	1	5
Under 14	2	1	2	5
Under 15	1	1	1	3
Under 17		2	1	3
セリエリーグ	1 in Terza Divisione;	1 in Seconda Divisione; 1 in Prima Divisione; 1 in SerieC	1 in Seconda Divisione; 2 in SerieD	7
合計	14 チーム	11 チーム	12 チーム	
			合計チーム数	37 チーム
			合計選手人数	710人

がたくさん出来ることになる。1シーズンの間に、多数のチームが良い思いを出来る状況といったらよいだろうか。この点は、チームのモチベーションに良い効果を与えていると思われる。また、それによって観客に見ごたえのある試合を豊富に提供することができる。

セリエA1、A2は地域の枠に関係なく、イタリア全土でのNo.1を決めるリーグだが、セリエB1（いくつかの州を合わせたリーグ）は4つの地域に分割されて行われる。B2はさらに8つの地域に分割される。CやDも同様に小規模の地域枠でのリーグとなる。それらのリーグはその地域（州や市の規模）で完結される。そして上位リーグの下位と下位リーグの上位が入れ替わり、セリエA1を頂点として、上のリーグに進むにつれて試合の舞台が広がっていくという形態になっている。アンダー（年齢別）の試合は、各州の予選から全国大会まで行われる。

## 2. データの活用

イタリアはデータバレーの進んだ国として認識されていることと思う。現在多くのユーザーを持つデータソフト、「データバレー」はご周知の通りイタリアから世界中に広がった。さらに試行錯誤を繰り返し、新しいデータの開発に余念がない。イタリアの指導者達は、「バレーボールを考える」ということをどこの国よりも進めていると自負している。各チームには例外なくアナリストがおり、データを専門的に分析し、チームづくりにおける重要なポジションを確立している。

近代バレーは情報戦の要素が色濃くなり、データを活用して得点の確立を高めることがますます重要になってきている。練習でもそのデータによって強みと弱みが明らかにされ、それをふまえ練習内容が組み立てられる。そのような合理的意図が、試合に直結した練習、トレーニングにつながっていると考える。さらに、何を意図しての練習であるのか、どこにポイントを置いて練習をするのかという選手の意識に働きかけ、モチベーションコントロールについてもデータが活かされている。何か数学の証明問題のように、無駄なく整理された印象を受ける。こうして大事な局面に及んでも、それらが説得力を持ってそこにあり、正しく問題を解いているのだから負けるはずがないという、根拠のある自信につながっていくのかもしれない。

よく言われることだが、例えば大事な試合に挑むにあたって、相手と戦う以前に自分



とも闘わねばならない。それは、大事な局面では虚勢ははぎとられ、やってきたこと以外、なんの役にも立たないということ、その時「実感」として感じるからだ。隠れていた（隠していた）不安要素が赤裸々に前へ出てきてしまう。そしてそれにとらわれてしまう。本当に大事な局面では、どういう過程で今までやってきたかということが唯一の持ち物となり、それを持って相手に対するしかない。その意味で日常の練習への取り組みにおいて、アスリートとしての自己形成、精神力はもちろんのこと、土壇場でこそ、新しく進歩してきているツール（データや、システム、そして戦術、戦略）が活かされるようにならなくてはいけない。このチームでの研修で、改めてそう感じさせられた。

研修レポートvol.5 2005/05/24

—イタリアでの選手の育成について—

視察先：U年齢別、TROFEO、セリエD・C・B2・B1

多くの人々を感動させる「スポーツの力」は偉大だ。一流のスポーツ選手達は、子供達に憧れを持たせ、目標に向かう道標を示してくれる。そして、我々の社会に活力を与えてくれる。華々しい表舞台のみならず、その舞台裏でも様々なドラマがある。たとえ試合に出ることが出来なくても、チームの為に貢献する者達。スポットの当たらない、裏方の仕事をする者達。祈る思いで子供を見守る親達…。

スポーツをする者は誰しも、沢山の声援を背に受け、大きな舞台で活躍することを夢見ている。しかしながら、それは一握りの狭き門だ。特にチームスポーツでは、その夢を実現することなく、選手生活を終える選手も沢山いる。スポーツの素晴らしさ、楽しさを、より多くの子供達に伝えるために、何が出来るだろうか。

1. イタリアでのU年齢別のリーグ構成

U年齢別リーグの試合期間は、各年齢層のチーム数によって多少異なるが、10月から

表6

ITALIAクラブチーム / アンダー年齢別のリーグ構成（女子）

Minivolley	12歳以下対象のミニバレー。
U12	ローカル。各地域・州別で行われる場所もある。
U13	
U14*	各年齢層別で、地域・州予選から全国大会まで行う。
U15*	
U17*	
U19	ローカル。各地域・州別で行われる場所もある。

ITALIAクラブチーム / Serie各カテゴリのリーグ構成

3Divisione	Provinciali
2Divisione	(地域別小規模のリーグ)
1Divisione	
SerieD	Regionali
SerieC	(各州別でのリーグ)
SerieB2	8Zone (イタリアを8つのゾーンに分割してのリーグ)
SerieB1	4Zone (イタリアを4つのゾーンに分割してのリーグ)
SerieA2	Nazionali
SerieA1	(イタリア全土でのリーグ)

始まり、翌年の4月か5月まで行われる。セリエ・リーグと同様、試合数は多く長い。U12からU15までは、すべての年齢層でリーグが行われている。その後はU17とU19となっているが、高校生以上の有望選手は大抵、セリエ・リーグのチームにも所属している。イタリアのクラブチームのほとんどは、U年齢別のチームと、セリエ・リーグのチームを両方所有しているため、例えば、セリエ・リーグのチームでは控えで、試合に出ることが出来なくても、U年齢別の試合に出場することが可能になっている。(U年齢別のリーグと、セリエ・リーグの試合が同じ日時に当たっていない場合。)以上の点で、日本と比べて選手の試合出場のコアがコク多く作られているといえる。

## 2. TROFEO (U15対象のイタリア版アクエリアスカップ)

U15のリーグ途中に、TROFEO (U15対象のイタリア版アクエリアスカップ)が行われる。始めに各都市の代表チームスタッフが選手を選考して、TROFEO DELLE PROVINCE (各都市対抗の州予選)がある。(表7参照)イタリアには20の州があるが、チーム数の少ない州は近隣の州と合わせての予選となる。日程は各州によって異なる。この大会はこれで完結し、優勝チームが州の代表になるわけではない。そこから今度は、各州の代表スタッフが各都市のチームから有望選手を選考して新たに選抜チームをつく

表7 TROFEO DELLE PROVINCE 2005 (各都市対抗の州予選)

イタリア州予選出場チーム数	試合日程
Abruzzo 男子4チーム+女子4チーム	6月2日
Basilicata 男子2チーム+2女子2チーム	5月8日、15日
Calabria 男子3チーム+女子3チーム	4月?日、5月?日
Campania + Molise 男子5チーム+5女子5チーム	6月11、12日、6月18、19日
Emilia Romagna 男子9チーム+女子9チーム	4月30日、5月1日
Friuli V.G. 男子4チーム+女子4チーム	5月15日
Lazio 男子6チーム+女子6チーム	5月21、22日
Liguria 男子5チーム+女子5チーム	3月6日、13日
Lombardia 男子12チーム+女子12チーム	5月28、29、30日
Marche 男子4チーム+女子4チーム	5月28、29日
Piemonte 男子8チーム+女子8チーム	1月16日
Puglia 男子5チーム+女子5チーム	5月11、12日、5月18、19日
Sardegna 男子4チーム+女子4チーム	5月15日
Sicilia 男子9チーム+女子9チーム	5月?日
Toscana 男子10チーム+女子10チーム	5月29日、6月2日
Umbria 男子4チーム + 女子4チーム	5月29日
Veneto + Trento 男子8チーム+女子8チーム	5月21、22日

り、7月3日から8日にかけてTROFEO DELLE REGIONI（州対抗戦）がある。

そして選抜された州の代表チームから、さらに優秀な選手をCLUB ITALIAへ集めることが出来れば良いのだが…これは実際には難しいようだ。それは各クラブチームでも、U年齢別リーグのクラブからセリエ・リーグのクラブへの一貫育成が進められているからだ。



### 3. クラブイタリア（イタリアナショナルユースチーム）選手のその後

今シーズン、クラブイタリアは、セリエB2リーグに参戦した。成績は14チーム中10位であったが、来シーズンは一つレベルを上げて、セリエB1リーグに参戦する。リーグ順位に関係なく、協会の方針でそのように規定されている。2年周期で選手を入れ替え、セリエB2とB1の間を行き来しながら強化を図るという方針だ。

クラブイタリアの選手達のその後を見る目的で、セリエB1の試合を何度か視察に行った。そこでは昨年までクラブイタリアで活躍していた、将来有望な選手達が試合経験を積んでいた。セリエB1から下のリーグは外国人枠がないので、すべてイタリア人選手でのリーグとなっている。イタリアのチームの人数構成は、セリエ・リーグもU年齢別のリーグも、12名ほどが通常となっている。よって、上のリーグへの道は険しいといえるが、反面、その選手の実力にあったリーグで、試合経験を積むことができている。実際セリエA1のイタリア人選手の中には、セリエB1から頭角を現して、セリエA1まで上って来た選手が沢山いる。日本はその点チームの人数構成が多いので、高校又は大学卒業後にVリーグに進むという願望は、イタリアに比べて満たされやすいが、「超高校級」以外は入団してから長い下積みがあるのが普通で、場合によってはベンチにも入れず、バレー生活を終える選手も沢山いる。そういった選手達は、いくら将来有望であっても簡単に試合の出場機会を得られるわけではなく、「練習によって育つ」しかない。モチベーションコントロールに苦心する部分だ。それを考えると、よく耳にする、「試合に出ることだけが素晴らしいのではない。」という言葉は、苦しい現状の理由付けのようにも思えてくる。しかしながら、試合に出てプレーをすること意外に、バレーをする意味を見出すことに対して、日本は素晴らしい思想を持っていると考える。「バレーを通した人間教育」ということには、こういった背景もあるのかもしれない。イタリアのチームには、そういった思想は日本に比べて乏しいと感じている。そのかわり選手は、試合でパフォーマンスをするというモチベーションをもって練習し、「試合経験によって育っている」と感じられる。

スポットの当たらない選手達のために、実体験として、声援を受けながらプレーをするという機会がつかれないだろうか。その充実感を、楽しさを、知ってほしいと考えている。

#### （4）研修を終えて

研修方法としては、良い方法ではなかったかもしれないが、私は多数のチームの指



導環境を見たいがために、転々と場所を変えながら研修を行なった。色々なバレー環境に飛び込んで学ぶ。この繰り返しで、新しい発見を促し、新鮮な心持を持続させるのに大きく役立った。人との出会い、交流、それに費やしたエネルギーが多ければ多いほど、自分にプラスとなって返ってくることを、改めて実感することができた。

昔の人は途方もなく遠い距離でも歩いて人に教を請いに行ったという。その行為が学ぶ姿勢を固め、人との出会いを印象深いものにした。今はすぐにどこへでも行けて、情報も簡単に手に入るようになっているが、自分の足で出会いを得ること、そこから発見を得ることを忘れないでいたい。いつも学ぶ姿勢を忘れず、前進し続けたい、そう思っている。そういう気づきを与えてくれたこの研修に、深く感謝している。

しかしながら学んだだけでは価値はなく、それを具体的に実地、検討していかなければならない。そうして地道な努力を続けていくことで、今回の研修の還元をしていきたい。今後も日本から沢山の指導者がこの制度を活用して経験を積み、日本のスポーツが活性化していくことを願っている。